

お題ガチャ

千里

◇居酒屋で（あいつ今何してんのかな…）
と考える尾杉

◇深夜で二人きりの誓いをする尾杉

尾杉SS集

「乾杯！」

三つのジョッキが軽くぶつかり、カチン、と高い音が響く。今日はずっと楽しみにしていた飲み会だ。顔ぶれに変わりはないが、今回は奮発して普段よりいい店を予約した。いつもの店より少し値は張るけれど、たまにはこんな贅沢も悪くない。

「この焼き鳥うまつ！」

「刺身、口の中で溶けた……」

酒はほどほどに、美味しい料理を堪能する。俺と白石が『うまい、うまい！』とはしゃいでいる横で、キロランケがにこにこ微笑んでいた。

「いい食いつぶりだな」

「キロちゃんも食べてみな！　これ、このレバー美味すぎるから！　杉元も、ほら！」

差し出された串を受け取り、一口頬張る。途端、口の中に濃厚な旨みがじゅわりと広がった。こんな焼き鳥、初めてだ。

「外はパリッとしてて、中がとろける！　癖も苦味もなくてほんのり甘い。この

タレもいいな。ガツンとくる旨みと、炭火の香りが鼻に抜けてうまい！」

「おお、うまいな！」

「だろー！」

ぴゅう、と白石が口を鳴らす。美味しい酒に美味しい飯。こんなに楽しい飲み会は久しぶりだ。

「尾形も来れたら良かったな。残念だ」

酔いが回り始めた頃、キロランケがぼつりと呟いた。本当なら、今日は四人で飲む予定だった。しかし尾形は体調不良で来れなかったのだ。

尾形の家は俺の家の近所で、最近はどこらかの家に入り浸ることが多い。あいつが『体調が悪い』と言い出したのも、俺が尾形の家にいた時のことだ。すぐに病院へ連れて行き、診察の結果はただの風邪。今は家で寝ている、はずだ。

「尾形ちゃん、風邪だっけ？ 大丈夫なの？」

「ちゃんと医者に診てもらったから大丈夫だろ」

あっさり言い返すと、二人は少し驚いた顔をした。

「意外だな。杉元なら付きっきりで看病するのかと思った」

頬杖をついたキロランケが、薄く笑いながら言う。俺と尾形の関係は、とつくの昔にバレている。今更隠すことも後ろめたいこともないが、こういう時は少し面倒だ。

「まあ……、熱なくて食欲もあつたし、あいつが『行け』って言うから……」迷っていた俺を、尾形は『ガキじゃねえんだ。自分の面倒くらい自分でみれる。いいからさっさと行け』と一蹴し、玄関から追い出した。一応、おかゆやスポーツ飲料、ゼリー、もしもの時に備えて冷えピタまで用意して置いてきたが、それでも心配は尽きない。

(あいつ今何してんのかな……)

ちゃんと寝ているだろうか。部屋は寒くないか。もしや、持ち帰ってきた仕事をやっているんじゃないだろうか。考えれば考えるほど、不安が募っていく。心地よかった酔いが段々と醒め、頭の中には良くない想像ばかり浮かんでは消える。俺は本当に馬鹿だ。あの突き放すような言葉も、尾形なりの優しさだったのかもしれない。それなのに全てを真に受けて、あいつを一人にってしまった。

気付いてしまえば、もう駄目だ。ジョッキに残った酒を一気に飲み干し、勢い

よく立ち上がる。

「ごめん、やっぱ心配だから帰る」

楽しい飲み会に水を差してしまったというのに、白石とキロランケはまるでこ
うなることが分かっていたかのように笑って送り出してくれた。自分の分と尾形
のキャンセル代を払おうとしたが、『それは今度でいいから、早く帰ってやれ』
と言われる始末だ。友人の厚意を無下にはできない。荷物を持って居酒屋を飛び
出し、案外寂しがり屋なあいつが待つ家へ、一目散に駆け出した。

「愛されてるねえ」

「愛されてるな」

美酒と美食に囲まれながら、男二人がぼつりと呟く。

「知らぬは本人たちだけだな。きっと」

残された者同士目を合わせ、どちらからともなく苦笑した。

話し声で目が覚めた。

何事かと周囲を見渡した先で、時計が一時半を指し示す。まだ日も登らぬ深夜だ。明日も仕事なのに、こんな時間に起こされては堪らない。小さく舌打ちをし、暗闇に慣れた目を音の発信源へ向ける。案の定、隣に寝ていた杉元がむにやむにやと何かを呟いていた。このままではとても安眠できそうにない。一度起こそうと手を伸ばした時、呟きが唸り声に変わった。

「なんで、どうして」

苦しげに寝返りを打ち、不自然に伸ばされた右手が空を切る。呼吸は荒く、しゃくり上げるような音が混じり始めた。みるみる悪化する状況に、どうすればいいのか分からず、頭が真っ白になる。

「うわあっ!!」

突然の悲鳴。勢いよく飛び起きた杉元に、ようやく我に返る。心臓がばくばくと音を立ててうるさい。杉元は肩で息をしながら、額から大粒の汗を流していた。「大丈夫か？」

呆然としている杉元の肩を叩くと、ようやく薄茶色の目がこつちを見た。瞬間、

あいつの顔がくしやりと歪む。

「おがた、生きてる？」

杉元らしくない、弱々しい声。さっきまでとは違う類の悪寒が走り、肌がざわりと粟立った。

「……はは、情けねえ。ただの夢なのに、取り乱した。ごめん、尾形。起こしちゃって」

暗闇の中でも分かる。杉元は今、酷い顔で笑っている。そうやって、何もかも飲み込んで生きるやつだ、こいつは。

「何があった？」

できる限り冷静を装って問いかける。真正面から覗き込んだ杉元の目が、一瞬迷うように揺れた。

「何でもないって。ほら、明日も早いんだろ。もう、寝ないと」

「杉元」

遮るように名前を呼ぶと、杉元の肩がわずかに跳ねる。

「何を見た？」

問い詰められた杉元はバツが悪そうに目を伏せ、ぽつりと呟いた。

「尾形が、死ぬ夢」

そこからは、堰を切ったように言葉が零れ落ちていく。

「長い銃で自分の頭を撃ち抜いて、どこか高い所から落ちていった。俺は、なんでも尾形がそんなことをしたのか分からなくて、苦しくて、どうしてか、ものすごく悔しかった」

おもむろに薄茶の瞳が上を向く。わずかな光を反射したその瞳が、昔見た金色に見えて、ぞっとする。

「そんなもの、ただの夢だ。気にすることはない」

思わず口をついて出た言葉に、自分でも驚いた。杉元を見ると、案の定、これでもかと目を見開いて俺を見ている。

「え、慰めてくれてんの？　もしかして寝惚けてる？」

こいつは、俺を何だと思ってるんだ。反論する気力も湧かず、代わりに盛大な舌打ちをして杉元に背を向けた。

「はは、冗談だよ。……心配してくれて、ありがとうな」

柔らかな声が降り注ぐ。昔はあの子供に向けられていた、慈愛に満ちた響きが、今は俺だけのものだ。それだけで満足だったはずなのに、いつの間に俺はこんなにも欲深くなったのだろう。

背後で、杉元が布団にもぐり込む音がする。しばらくして静まり返ったかと思えば、長く重いため息がひとつ、部屋に響いた。

「お前、勝手にどっか行くなよ、尾形。取り残されるのは、辛い」
まるで独り言のような呟きに、全身が強ばる。

お前は、全てを思い出したらきつと俺から離れていく。もしくは、この平和な世でも俺を殺そうとするだろう。交わした言葉も、関係も、すべてなかったことにして、あの冷たい金の瞳で俺を射殺すのだ。

「……どこにも行かねえから、早く寝ろ」
自分でも驚くほど穏やかな声が出た。

「うん」

気の抜けた返事が返ってきて、胸の奥がかすかに緩む。

お前は思い出さなくていい。何も知らなくていい。過去なんて、全て無くなればいい。この甘ったるい夢のような現実の中で、もう少しだけ生きていたい。今思うことは、ただ、それだけだ。

夜の暗闇の中、時計の秒針だけがひっそりと鳴り響いていた。

千里